

聖書：ローマ 16：21～27

説教題：知恵に富む唯一の神に

日時：2016年10月9日（朝拝）

ローマ人への手紙の最後の箇所となりました。調べてみると、この書の1回目の説教を行なったのは2015年3月1日。以来、1年と7ヵ月少々この書を見て来たこととなります。珠玉の御言葉で満ちていたローマ書を読み終えるのは寂しくもありますが、聖書は読んで終わりとする書物ではありません。学んだ者として、そこに生きることが残されています。この結びの部分を読んで、私たちはこの真理に生きることへいよいよ導かれたいと思います。

16章1～16節では、手紙の宛先であるローマの教会への挨拶が述べられました。それに対して今日の21～23節は、パウロがこの手紙を執筆したコリントの人たちからの挨拶が記されています。先にはローマの地にある様々な人々が主にあって一つに結ばれて歩んでいる、その交わりの麗しさを見ましたが、今日の箇所からはコリントにいるクリスチャンたちの交わりの様子が分かります。ここにも福音がもたらしている素晴らしい一致と交わりの一端を垣間見ることができます。

最初は「同労者テモテ」。パウロの愛弟子です。彼は第2次伝道旅行でパウロに見いだされ、以後パウロの欠かせないパートナーとなりました。聖書にはパウロがテモテに書いた手紙が二つ残されていますが、そこには「信仰による真実のわが子テモテ」とか、「愛する子テモテ」と記されています。いかにパウロが彼を深く愛し、慈しんでいたかが分かります。またパウロはテモテの働きを高く評価していました。ピリピ2章22節：「テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。」

次は同国人ルキオとヤソンとソシパテロ。最初のルキオはどういう人物か良く分かっていません。ある人は使徒の働き13章に出て来るアンテオケ教会のリーダーの一人、クレネ人ルキオではないかと言い、また他の人は医者ルカのことではないかと言いますが、この二人はどちらも異邦人です。しかしここに出て来るルキオはパウロの同国人、すなわちユダヤ人であるとすると、今見た二人とは別人だと考えられます。二人目のヤソンについてはその名に聞き覚えのある人もいるでしょう。使徒の働き17章でテサロ

ニケの町で暴動が起こった時、人々はパウロを捕えることができず、代わりにパウロを迎え入れたヤソンと兄弟たちを捕らえたと記されています。ヤソンは後に保証金を払って釈放されましたが、その彼がこのコリントに来ていたのかもしれませんが。3人目はソシパテロ。使徒の働き 20 章には異邦人教会からの献金をエルサレムに運ぶ代表使節たちのリストが記されていますが、その中のソパテロがこのソシパテロと同一人物だろうとほとんどの学者は言っています。とすると彼はベレヤの教会に集っていたユダヤ人クリスチャンということになります。

次の 22 節から、新しい事実を私たちは知ります。「この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあってあなたがたにごあいさつ申し上げます。」彼はパウロの言葉を口述筆記した人です。彼はここ以外には出てこない無名の人物です。面白いのは、これまでパウロの立場でこの手紙を記して来た彼が、突然自分自身に返って「私、テルテオも」と一人称で挨拶していることです。皆の挨拶を記す中で、「私も挨拶を書いていいですか」とパウロにお願いしたのか、それともパウロから「あなたも是非挨拶しなさい」と勧められたのか分かりませんが、何となくユーモラスです。注目すべきは無名の彼もここで排斥されていないことです。主にあって挨拶を送る一人に加えられています。

次はガイオ。1 コリント 1 章 14 節を見ると、彼はコリント教会の中でパウロから直接洗礼を受けた数少ない信者の一人であったことが分かります。「私と全教会との家主」と言われていることからすると、パウロのために宿を提供し、また多くのクリスチャンに家庭を開放して仕えた人だったのでしょう。この彼は使徒の働き 18 章 7 節に出て来るテテオ・ユストと同一人物と考えられています。パウロはコリントのユダヤ人会堂で迫害され、隣のテテオ・ユストの家で宣教したと記されていますから、これは彼の家がコリントにある家の教会の一つだったということかもしれません。

次は市の収入役エラスト。ここにこの世の公的な仕事についているクリスチャンを私たちは見ます。クリスチャンになるとは、この世と関わらない者になることではありません。この世の政治的秩序も神の支配の下にあります。信仰を持ちつつ、立派に公的な立場で働いていた人の例を私たちはここに見るのです。

そして最後に「兄弟クワルトもよろしく」と出てきます。彼については「兄弟」とあるだけで、特別な肩書きはありません。だからと言って、挨拶から除外されてはいませ

ん。彼も主にある一人として、その挨拶がこのローマ書にとどめられています。

このようにコリントにある群れも多種多様です。直接的な伝道者もいれば、教会代表の使節もいる。また地道に書記を務めるしもべ、家庭を開放して仕えている人、市の行政に関わっている人、また肩書きがないけれども主に従っている人……。一人一人は違っていいのです。しかし大事なことは、そのような色々な種類の人、色々なタイプの人が主にあって一致していることです。お互いの違いが争いや分裂のもとにならず、むしろお互いただ恵みによって救われた者として、神が結び合わせてくださったこの交わりを尊び、喜び、お互いを受け入れ合い、愛し合いながら生きている。先に見たローマもそうでしたし、このコリントもそう。私たちはそのことを見て取って、私たち益々主が造ってくださっている一致と平和を感謝し、これを尊ぶ歩みへ向かうように導かれるべきではないでしょうか。

パウロは最後に神への賛美・頌栄をもってこの書を結びます。25 節から 27 節：「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしまでありますように。アーメン。」ここは原文のギリシャ語では一つの文章で、またローマ書の内容を凝縮する言葉になっています。また注解者が指摘する通り、手紙冒頭の 1 章 1～5 節と非常に良く似ています。つまりパウロはこの手紙を書くにあたって、まず冒頭でその内容を思わず凝縮した形で語り、また最後にも神への賛美を記す中で思わず凝縮する言葉で書いたということでしょうか。そういう意味で内容がぎっしり詰まった頌栄ということになります。

まずパウロがこの賛美の中で語っていることは、この神があなたがたを堅く立たせてくださるということです。ギリシャ語ではその部分が先に記されています。ちなみにこの手紙の 1 章 16 節では「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」とあり、そこでも神こそが力を持っていると述べられました。しかし救うばかりでなく、堅く立たせてくださるのも神である！とこの結びの部分で言われています。ここに私たちが今日、心に留めるべき大切なメッセージがあります。私たちはこの書を読み終えて、あとは自分の力で生きるのではないので

す。私たちが堅く立たせてくださるのは神なのです。私たちの望みは神にあります。私たちはこの神を見上げ、この方により頼んで、これからの信仰生活を歩むべきなのです。

では神はどのようにして、私たちが堅く立たせてくださるのでしょうか。その方法も指定されています。それは「私の福音とイエス・キリストの宣教によって」ということです。「私の福音」とは、パウロが神から受けた福音のことです。また「イエス・キリストの宣教」とは、イエス・キリストを内容とする宣教のことです。ですからこれは別々のことではなく、パウロが神から授かったイエス・キリストを内容とする福音のことです。大事なことは、神が私たちが堅く立たせてくださるのは、イエス・キリストの福音を通してという方法によるということです。この福音が「奥義の啓示」とも言われています。「奥義」とはミステリーという言葉ですが、奥義と言うと、私たちは通常の間人にはなかなか悟れない難しい神秘といったイメージを持ちやすいと思います。しかし聖書が言う奥義は意味が少し違います。聖書が言う奥義とは、ここに記されているように「長い間隠されていたが、今やついに現わされたこと」を指します。それは何のことでしょうか。それは一言で言ってイエス・キリストのことです。イエス・キリストのことは旧約聖書でも言われて来ました。ここでも「預言者たちの書によって」と言われています。しかしキリストが歴史に現れるまでは、それはベールに包まれたような状態にありました。後から振り返れば確かにキリストを指す預言が旧約聖書にたくさんあるのが分かりますが、その方が現れるまでは、隠されていたような状態、ぼんやりした状態にあったというのは本当でしょう。しかし今や時満ちて、その方が現れた。旧約聖書の預言通り、処女降誕を経て、罪のない地上の生涯を送り、十字架によって死に、復活し、天に昇り、聖霊を注がれた。このキリストの出来事こそ、神の奥義です。コロサイ書1章27節:「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」また2章2~3節では「神の奥義であるキリスト」と言われ、「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」とされています。神は実にこの奥義によって、すなわちイエス・キリストによって、私たちが救い、また堅く立たせてくださるのです。パウロはそのことをこの手紙で語って来ました。そしてこの書を閉じるにあたって、彼はそのことを思い、ここに示された神の知恵を賛美せずにはいられなかったのです。

果たしてこの福音に示された神の知恵とは具体的にどのようなものでしょうか。この書のまとめとして、この手紙の区分に従って短く振り返って見たいと思います。まず私

たちが1～4章で見たのは「義認における神の知恵」です。聖なる神はどのようにして罪人を救うことができるのか。義であるお方は罪人を救えないのではないか。しかしその方法が3章に記されました。すなわち罪のないイエス様を私たちの罪のために、代わりに罰するということです。そこにおいて神はご自身の義を満たしつつ、同時に罪人を救うという道を開かれた。私たちは自分の良い行ないによらず、ただイエス・キリストを信じることによって罪を赦され、またこの方が持つ100点満点の完全な義を受け取り、神の祝福の中に立つことができる。これは自分の罪をどうすることもできない私たち罪人にとって何という希望のメッセージでしょうか。4章5節：「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」どんな不敬虔な者でも、この祝福を受けることができます。行ないにはよらず、ただ信仰を通して、義とされ、神の祝福に生きることができるのです。一体誰がこのようなことを考えることができたでしょうか。しかし神はこのことをしてくださいました。そしてそれを福音の中に示してくださいました。

第二の区分である5～8章で見たのは「聖化における神の知恵」です。義認の祝福は今見たように、私たちの行ないによらず、ただ信仰によります。とすると私たちから出て来る考えは、では私たちは良い行ないをする必要はないのでは？というものです。恵みによって救われる素晴らしさがいよいよ明らかにされるために、もっと悪いことをしたって良いのではないか。罪の中にとどまった方が良いのではないか。しかしそうではありません。義認の祝福は、キリストを信じ、キリストと結ばれた人に与えられます。そしてその人はキリストと結ばれたことから来る新しいいのち、再生の恵みの中にあります。この新しいいのちと切り離された義認はないのです。つまりクリスチャンは新しい性質を与えられています。ぶどうの木と枝のたとえのように、枝である私たちにはキリストのいのちが流れて来ています。従って良い実は必ず生み出されて来る。ですから良い実が何も出て来ないなら、その人は義と認められているとは言えないということでもあるのです。今日の箇所にも「信仰の従順」という言葉があります。これは1章5節にも出て来ましたが、信仰は従順な生活に結実します。従順に現れ出ない信仰はないのです。

時々、信仰義認のメッセージを受け止めつつも、自分は実質的に何も変わっていないと言う人がいます。私もかつてはそう思っていました。信じて洗礼を受けた後と、その前とは劇的な変化はない。信仰は告白したが自分の実質は以前のまま、と。しかし聖

書はそう言いません。キリストに結ばれた者は以前と状態が全く変えられています。キリストのいのちが流れ込んで来ています。もう前とは本質的に状態が異なっている。これを受け止めるところから、そういう者らしく歩め！という聖化の歩みが始まるのです。

そして必ず最後の栄光の状態まで導かれることが8章で述べられました。私たちの内には聖霊が住んでとりなしていてくださいます。また天では御子をご自身の地上のわざに基づいてとりなして下さっています。そして父なる神は永遠の昔からの計画に基づいて、すべてのことを働かせて益としてくださいます。こうして栄光のゴールに確実にたどり着かせていただけるのです。これは何という真理、何という神の知恵でしょうか！

そして第三区分である9～11章で見たのは「人間の歴史における神の知恵」です。旧約時代はイスラエルに救いが限定されていましたが、今や全世界に福音はさし向けられています。今日の箇所にも「あらゆる国の人々に知らされ」とあります。これは「永遠の神の命令に従い」とあります。そしてここで扱われたのはイスラエルの不信仰の問題でした。なぜ当時、ユダヤ人は福音を拒絶し、教会は異邦人で満ちていたのか。イスラエルに対する神の計画は失敗したのか。それに対してパウロは神の奇しい知恵がここにあると語りました。すなわちユダヤ人が福音を拒絶したことによって救いが異邦人に広がった。しかしこれはイスラエルが捨てられたことを意味しない。むしろ異邦人に広がった祝福は、ユダヤ人のねたみを引き起こし、やがてそれはユダヤ人の救いにつながる。歴史はそのような仕方で行き進み、ついに神の定めたゴールに達すると。一体誰がこんなことを考えられたのでしょうか。私たちはこのことを聞いても頭がくらくなり、十分に理解できません。しかし神には難しいことはありません。そこでパウロは11章33節で「ああ、神の知恵と知識との富は何と底知れず深いかな！」と頌栄を歌いました。

そして最後の区分である12～16章では、それまで語られた福音の教理に基づいて、その実践的適用について勧められました。この福音を思い起こす時、私たちもパウロと声を合わせて、27節のように「知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。」との賛美を炸裂させずにいられないのではないのでしょうか。「とこしえまで」とありますように、知恵に富む神は永遠に賛美しても賛美し尽くせないお方なのではないのでしょうか。

以上、パウロはローマの教会の訪問に先立って、自己紹介を兼ねて、自分が神から授かった「神の福音」を解説して来ました。そして最後に「神はあなたがたを堅く立たせてくださる」と述べました。神は私たちがこのローマ書で見て来たイエス・キリストの福音を通して、そのことをしてくださいます。私たちは信仰の歩み続けるためのすべての力をここに求めたいと思います。このイエス・キリストの福音を通して神によってさらに固く立たせていただきたいと思います。そしてこれによって与えられる恵みを益々豊かに味わい、知恵に富む神に永遠に賛美をささげる歩みへ、またこの素晴らしい神とその福音を、これを知らずに歩んでいる多くの人々に告げ広める歩みへ進みたいと思います。